

## 日本語の動詞句イディオムにおける省略現象について

下村 郁佳

同志社大学大学院生

ctmc0015@mail4.doshisha.ac.jp

星 英仁

同志社大学

hhoshi@mail.doshisha.ac.jp

## 要旨

どのような統語的操作が動詞句イディオムに適用できるかについて、多くの研究者が言及しているものの、具体的な説明はなされていない。本発表は、Fraser (1970)や石田(2000)が扱っていない VEAs と NP 省略に着目し、イディオムによって VEAs と NP 省略に関わる統語操作の適用可能性が異なることを示し、日本語における動詞句イディオムの生成過程を提案する。Marantz (2010, 2014)の contextual alloosemy の考え方にに基づき、Merge によって生成された構造からどのようにイディオム的な解釈を LF で読み取ることができるのかを議論し、VEAs と NP 省略の容認可能性について考察をおこなう。本発表の提案が受身化における動詞句イディオムのコントラストも説明できることを指摘する。最後に、本発表の提案が他の統語操作にも応用できる可能性があることを示唆する。

## 1. はじめに

- 英語の phrasal イディオムを適用可能な統語操作によって階層化された Frozenness Hierarchy を提案 (Fraser 1970: 39)
  - (1) L6-Unrestricted; L5-Reconstruction; L4-Extraction; L3-Permutation; L2-Insertion; L1-Adjunction; L0-Completely Frozen
  - (2) あるレベルの階層に属するイディオムは、自身の属する階層よりも下のレベルの階層に自動的に属することとなる。ただし、L6 に属するイディオムは存在しない。
  - (3) a. L5 – Reconstruction: He *laid down the law* to his daughter – His *laying down of the law* to his daughter  
 b. L4 – Extraction: John *laid down the law* to Mary – *The law was laid down* to Mary by John  
 c. L3 – Permutation: *lay down the law* – *lay the law down*  
 d. L2 – Insertion: John *read the riot act* to the class – John *read the class the riot act*
- 日本語のイディオムに言及した研究: Miyagawa (1989), Matsumoto (1996), 石田 (2000), Tsujioka (2011), Kishimoto (2008, 2016)
- 石田 (2000): Fraser (1970)の分析を日本語の動詞句イディオムへ応用
  - (4) a. 日本語の身体語彙を含む動詞句イディオムは、名詞化、受身化、命令・意思表示付加、修飾語挿入、肯定・否定表現付加、イディオム全体への修飾語付加の統語操作の受容性によって6つのレベルに分けられ階層関係を成す  
 b. あるレベルの階層に属するイディオムは、自身の属する階層よりも下のレベルの階層の統語操作を受容する傾向がある
- Fraser(1970)と石田(2000)から生じる疑問点：
  - 各階層間の統語操作の受容性の違いはなぜ生じるのか → イディオムはどのように生成され、解釈されるのか

- 発表の目的

Fraser や石田が扱っていない統語操作である NP の省略現象 (verb-echo answers (VEAs) と NP 省略) に着目し、イディオムによって 2 つの統語操作の適用可能性が異なるという事実を指摘し、イディオムの生成過程を提案する。

## 2. 動詞句イディオムにおける Verb-Echo Answers と NP 省略

- Verb-echo answers (VEAs) とは、極性疑問文に対する応答のうち、疑問文で使われている動詞を反復して応答する形式のこと。

(5) フィンランド語 VEAs (Holmberg 2016:3) :

a. Tul-ilvat-ko          lapset    kotiin?  
 come-PST-3PL-Q   children   home  
 ‘Did the children come home?’

b. Tul-i-vat.  
 come-PST-3PL  
 ‘Yes.’

(6) 日本語の VEAs :

a. 太郎は [おにぎりを食べ] たの?    b. [太郎はおにぎりを] 食べたよ.

- 日本語の動詞句イディオムにおける VEAs

(7) a. 太郎は [けちをつけ] たの?    b. [太郎はけちを] つけたよ.

(8) a. 太郎は [道草を食っ] たの?    b. \*[太郎は道草を] 食ったよ.

(9) a. 太郎は [へそを曲げ] たの?    b. [太郎はへそを] 曲げたよ.

(10) a. 太郎は [手を回し] たの?    b. \*[太郎は手を] 回したよ.

- 日本語の動詞句イディオムにおける NP 省略

(11) a. 太郎は [けち<sub>1</sub>をつけ] た.    b. \*花子も ec<sub>1</sub> つけた.

(12) a. 太郎は [道草<sub>1</sub>を食っ] た.    b. \*花子も ec<sub>1</sub> 食った.

(13) a. 太郎は [へそ<sub>1</sub>を曲げ] た.    b. \*花子も ec<sub>1</sub> 曲げた.

(14) a. 太郎は [手を<sub>1</sub>回し] た.    b. \*太郎も ec<sub>1</sub> 回した.

(15)

	けちをつける・へそを曲げる	道草を食う・手を回す
VEAs	✓	*
NP 省略	*	*

(16) 上記イディオムにおける省略現象の文法性の差異はなぜ生じるのか.

### 3. 提案

#### 3.1 Contextual Alloosemy としてのイディオム

(17) 日本語のイディオムにおいて, Spell-Out の対象となる little v の補部が「イディオム解釈」(“non-literal,” “non-compositional,” and “special” meaning) の領域になる (cf. Marantz 2010, 2014)

(18) ギリシャ語の形容詞を派生する 2 種類の接辞: *-tos* と *-menos* (Anagnostopoulou & Samioti 2013, 2014)

a. *-tos*: 動作の状態を表し, 事象(event)の存在を含意しない

b. *-menos*: 動作の結果を表し, 事象の存在を含意する

(19) a. to parathiro ine anix-t-o

the window is open-*t*-NEUT.SG.NOM

‘the window is open’

b. to parathiro ine anig-men-o

the window is open-*men*-NEUT.SG.NOM

‘the window is opened’

(20) a.

Root<sub>event</sub> -tos

b.

Root<sub>thing/nominal</sub> -vC

c.

VoiceP -menos  
...Root... Voice

(21) *-tos* と *-menos* による non-literal meaning:

a. sfix-o ‘tighten’ sfix-tos ‘lit. tight’; ‘idiom. careful with money’ (= (20a))

b. kol-a-o ‘glue’ kol-i-tos ‘lit. glued’; ‘idiom. close friend’ (= (20b))

c. trav-a-o ‘pull’ trav-ig-menos ‘lit. pulled’; ‘idiom. far-fetched’ (= (20c))

● 日本語には 4 つのタイプの動詞句イディオムが存在する:  $\sqrt{}$  (Root), vC/nC (Categorizer), v (Phase head)

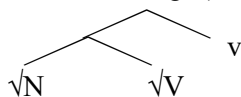
(22) a.  $\sqrt{N}$  と  $\sqrt{V}$  を Merge することによって生成されるイディオム

b.  $\sqrt{N+nC}$  と  $\sqrt{V+vC}$  を Merge することによって生成されるイディオム

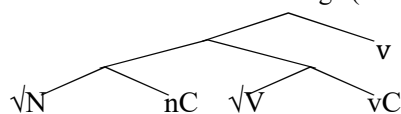
c.  $\sqrt{N}$  と  $\sqrt{V+vC}$  を Merge することによって生成されるイディオム

d.  $\sqrt{N+nC}$  と  $\sqrt{V}$  を Merge することによって生成されるイディオム

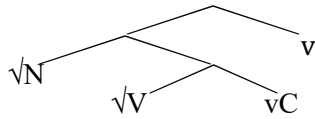
(23) a.  $\sqrt{N}$  と  $\sqrt{V}$  の Merge (=タイプ A)



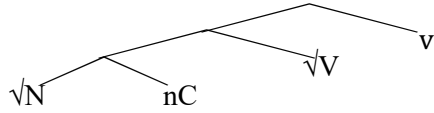
b.  $\sqrt{N+nC}$  と  $\sqrt{V+vC}$  の Merge (=タイプ B)



c.  $\sqrt{N}$  と  $\sqrt{V+vC}$  の Merge (=タイプ C)



d.  $\sqrt{N+nC}$  と  $\sqrt{V}$  の Merge (=タイプ D)



(24) a. タイプ A に属するイディオム :

道草を食う, 気を使う, 泡を食う, 裏をかく, 棚に上げる, 棒に振る, …

b. タイプ B に属するイディオム :

けちをつける, 注意を払う, 相槌を打つ, 手を貸す, 腹を探る, 頭を抱える, …

c. タイプ C に属するイディオム :

へそを曲げる, 足を洗う, 拍車をかける, 肩を持つ, 弓を引く, …

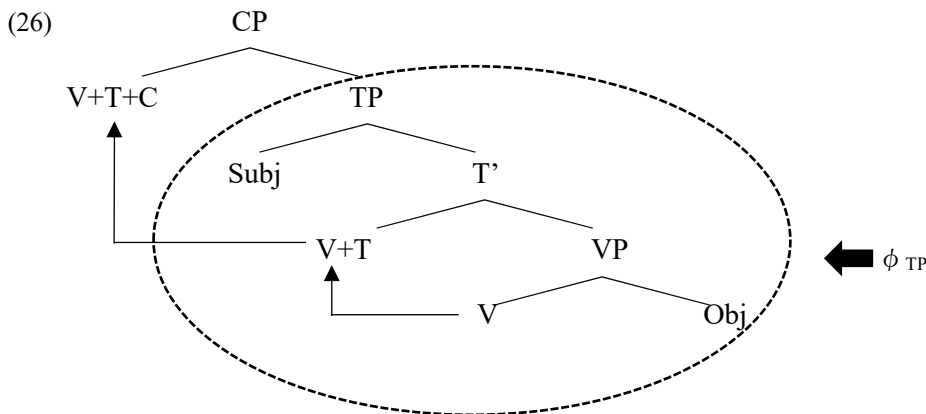
d. タイプ D に属するイディオム :

手を回す, 意表を突く, 穴を開ける, 目を配る, …

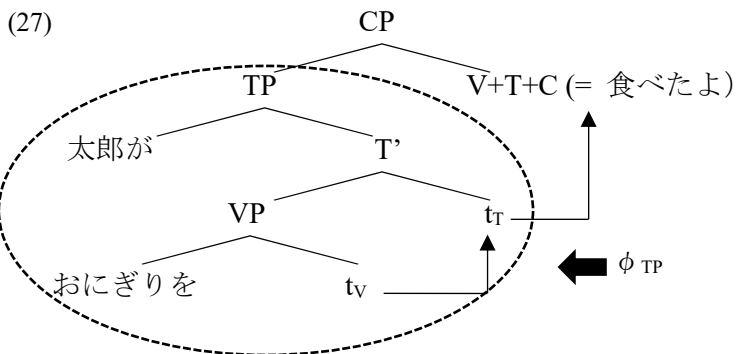
### 3.2 VEAs

● Holmberg (2016)における VEAs の分析

(25) 主語が TP の指定部へ移動し, 動詞 V が T の主要部を経由して C の主要部まで移動(V-T-C 移動)した後, TP 全体が PF において削除される



● 日本語の VEAs に Holmberg の分析を応用 (Sato & Hayashi 2018)



(28) ただし, VEs は V-T-C 移動+TP 省略によって常に生成されるわけではなく, (29)のように動詞以外の要素が残留した場合は TP 削除は適用されず, pro が生起する.

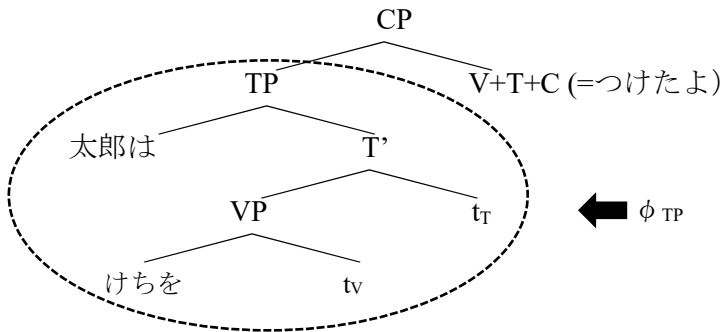
(29) 誰かが昨日ここでタバコを吸いましたか?

a. pro<sub>1</sub> 昨日 pro<sub>2</sub> 吸いましたよ.

b. pro<sub>1</sub> ここで pro<sub>2</sub> 吸いましたよ.

● イディオムの VEs (= (7b)-(8b)) の構造

(30) [太郎はけちを] つけたよ (= (7b))

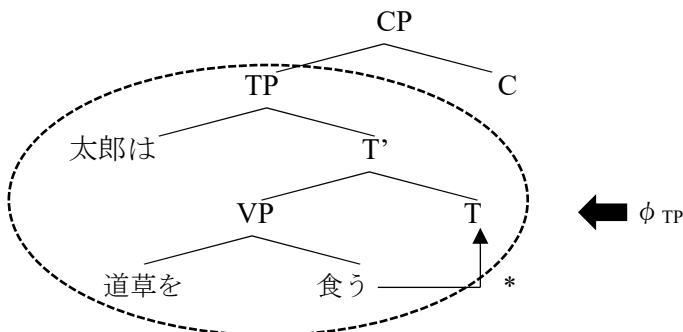


➤ 「けち」 ([√N+nC]) と 「つける」 ([√V+vC]) が Merge されているため, 「つける」 は単独で V 移動が可能であり, TP 全体が PF で削除され, VEs を生成できる.

➤ 「へそを曲げる」 (= (9b)) の場合, 「√へそ」と 「曲げる」 ([√V+vC]) が Merge されているため, 同様に 「曲げる」 は単独で V 移動が可能であり, VEs を生成できる.

(31) √X+nC/vC が移動の対象となり, √X のみは移動できない.

(32) \*[太郎は道草を] 食ったよ. (= (8b))



➤ VEs は PF での TP 削除により生成されるため, (32) の非文法性は PF で TP 削除ができないことによる → V が移動できないため, TP 削除が不可となる.

➤ 「道草を食う」 は 「√道草」と 「√食う」 が Merge されており, √V の移動は不可能となり, VEs を生成できない.

➤ 「手を回す」 (= (10b)) の場合, 「手を」 (√N+nC) が 「√回す」と Merge されており, √V の移動は不可能となり, VEs を生成できない.

● Richard (2001) は, give A to~ の形式を持ち, 二重目的語構文と与格構文の変換が不可能である英語のイディオム (= (33)) のほとんどが裸名詞 (bare-NP) であるという観察をしている.

➤ Fraser の Frozenness Hierarchy における L2-Insertion (=3d)が適用できない。

(33) a. give chase to ‘を追いかける’

b. give rise to ‘を引き起こす’

c. give way to ‘に取って代わられる’

d. give flak to ‘を非難する’

➤ 本研究の提案を適用すれば、英語のイディオムに裸名詞が多いのは、Root 要素の Merge を含んでいる可能性がある。

● 直接受身文を生成できるかどうかについても、Root を Merge するという分析からコントラストを説明することができる。

(34) a. けちがつけられた。

b. \*道草が食われた。

c. \*へそが曲げられた。

d. 手が回された。

➤ (34a)では「けち」( $[\sqrt{N+nC}]$ )と「つける」( $[\sqrt{V+vC}]$ )が Merge されており、「けち」の移動が可能になる。

➤ (34b)では「 $\sqrt{\text{道草}}$ 」と「 $\sqrt{\text{食う}}$ 」が Merge されており、Root のみの「 $\sqrt{\text{道草}}$ 」を移動できない。

➤ (34c)では「 $\sqrt{\text{へそ}}$ 」は「 $\sqrt{\text{曲げる}}$ 」( $[\sqrt{V+vC}]$ )と Merge されており、Root のみの「 $\sqrt{\text{へそ}}$ 」を移動できない。

➤ (34d)では「手」( $[\sqrt{N+nC}]$ )は「 $\sqrt{\text{回す}}$ 」と Merge されているため、「手」の移動が可能になる。

### 3.3 NP 省略

● NP 省略は2つの生成過程が考えられる：

(35) a. 省略箇所には pro が生起する (Hoji 1985).

b. 省略箇所は overt syntax で空であるが、LF で復元される (Sakamoto 2019).

● (11)-(14)を pro 分析を用いて考える (Hoji 1985)：

(36) a. 太郎は 昨日 おにぎりを 食べたの?      b. pro<sub>1</sub> 昨日 pro<sub>2</sub> 食べたよ.

➤ Sato & Hayashi に従って、この VEAs は pro が生起していると考えられる。

(37) a. 太郎は 昨日 けちを つけたの?      b. \*pro<sub>1</sub> 昨日 pro<sub>2</sub> つけたよ.

(38) 動詞句イディオム内の N は pro として生起できない。

➤ (11)-(14)の NP 省略も pro であるならば、全て非文となる。

● (11)-(14)を Sakamoto の省略分析を用いて考える。

● Bruening (2010:532)に従い、イディオムの意味解釈原理として(39)を仮定する。

(39) X が Y を選択する場合においてのみ、X と Y をイディオム的に解釈できる。

● Sakamoto の分析に従うと、(11)-(14)は overt syntax で動詞句イディオム内の N は V に選択されないため、(39)の制約によって非文法的となる。

#### 4. おわりに

- (40) a. 日本語の動詞句イディオムには4タイプの生成過程が関わっている。  
b. Spell-Outの対象となるvの補部が「イディオム解釈」(“non-literal,” “non-compositional,” and “special” meaning)の領域になる。  
c.  $\sqrt{X}$ は移動の対象とはならない。  
d. 日本語の動詞句イディオム内のNはproとして生起することができない。  
e. 日本語の動詞句イディオム内のNはVに選択されなければならない。
- (41) 本研究で対象とする統語操作は限定的で、包括的ではないものの、動詞句イディオムの生成過程から、他の統語操作(移動操作・付加操作)にも応用できる可能性がある。

#### 参考文献

- Anagnostopoulou, Elena, and Yota Samioti. 2013. Allosemy, idioms and their domains: Evidence from adjectival participles. In Raffaella Folli, Christina Sevdali, and Robert Truswell (eds.), *Syntax and its limits*, 218-250. Oxford University Press.
- Anagnostopoulou, Elena, and Yota Samioti. 2014. Domains within words and their meanings: A case study. In Artemis Alexiadou, Hagit Borer, and Florian Schäfer (eds.), *The syntax of roots and the roots of syntax*, 81-111. Oxford University Press.
- Bruening, Benjamin. 2010. Ditransitive asymmetries and a theory of idiom formation. *Linguistic Inquiry* 41: 519-562.
- Fraser, Bruce. 1970. Idioms within a transformational grammar. *Foundations of Language*. 22-42.
- Hoji, Hajime. 1985. Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Holmberg, Anders. 2016. *The syntax of yes and no*. Oxford University Press.
- 石田プリシラ. 2000. 「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』7: 24-43.
- Kishimoto, Hideki. 2008. Ditransitive idioms and argument structure. *Journal of East Asian Linguistics* 17: 141-179.
- Kishimoto, Hideki. 2016. Idioms. In Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.), *Handbook of Japanese lexicon and word formation*, 665-704, Mouton De Gruyter.
- Marantz, Alec. 2010. Locality domains for contextual allosemy in words. Handout of a talk given at the University of California, Santa Cruz.
- Marantz, Alec. 2014. Locality domains for contextual allomorphy across the interfaces. In Ora Matushansky, and Alec Marantz (eds.), *Distributed Morphology Today: Morphemes for Morris Halle*, 95-115. MIT Press.
- Mastumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion Word*. CSLI Publications.
- Miyagawa, Shigeru. 1989. *Structure and Case-Marking in Japanese*. Academic Press.
- Richards, Norvin. 2001. An idiomatic argument for lexical decomposition. *Linguistic Inquiry* 32: 183-192.
- Sakamoto, Yuta. 2019. Overtly empty but covertly complex. *Linguistic Inquiry* 50: 105-136.
- Sato, Yosuke and Shintaro Hayashi. 2018. String-vacuous head movement in Japanese: new evidence from verb-echo answers. *Syntax* 21: 72-90.
- Tsujioka, Takae. 2011. Idioms, mixed marking in nominalization, and the base generation hypothesis for ditransitives in Japanese. *Journal of East Asia Linguistics* 20:117-143.